

# 恋草

別名 思妻・濱田・恋妻

シテ  
濱田の妻（帥の局）  
ツレ  
濱田の侍女侍従  
ワキ 濱田某

「加様に候者は。濱田の何某殿に仕へ申者にて候。

儲も頼み奉りし人の北の御方は。帥の局と申て。

禁中第一の美人にて候ひしが。今は濱田殿の妻と成給ひて候。爰に又左衛門尉政長殿と申て。隠れなき色好みの御座候が。有時帥の局。大覺寺殿へ御越のみぎり。政長殿かひまみ給ひ。数々の玉章を送り申され候へども。本来まゝならぬ御身なれば。更々御聞入も御座なく候程に。政長殿為方なき余りにや。情なくも濱田どのを讒し給ひ。流人の身となし給ひて候。北の御方の御歎き大方ならず。今ははや思ひの床に臥給ひ。御命もあやうく見えさせ給ひ候。誠に御労はしき御事にて候。けふはまた雨中。御つれぐくに御座候はん程に。参りて御様体をも窺ひ申。御心を慰め申さばやとおもひ候。

るらん。数々に。思ひおもはず。とひ難み。身を

しるあめは。ふりぞ増れる。

ツレ女  
「いかに申上候。侍従が参りて候。

シテ  
「侍従と申歟。此方へ来り候へ。

ツレ女  
「けふは物さびしき雨の中。御心地は何と御入候ぞ。

シテ  
「さなきだにいとゞくるしき枕の上に。窓うつあめ

の音高く。

カル  
「夢もむすばぬ思ひねの。難面命のおしかるも。あ

かで別れし我妻に。またもあふせの憑みかな。

ツレ女  
「実々御歎き尤にて候。さりながら。御心やすくお

ぼしめされ候へ。殿は御身に御誤りなき通りを。

君聞召及ばせ給ひ。頓て御帰京有べきとの御事也。

唯御心をとりなさせ給ひ。御薬をも用ひ給はゞ。

すゑは目出たふ御対面にて候べし。

シテ  
「嬉しき人の言葉かな。科なき妻の左遷のつみも。

たゞ我ゆへとおもへば猶も。

カール

「五の障りをもきがうへの。身の後の世もをしはかられて。やるかたもなき小車の。廻りあひなば憂事も。晴て行なん心の月の。曇らぬ御影憑むなり。

同 「実やたのむの雁金も。花を見すてゝ行空の。雲井遙かにたちへだつ。妻の音信もなき世の中ぞ悲しき。

歌、同

「こぬ人をまつほの浦の夕なぎに。く。焼やもしほのこがれゆく。身はうきふねの。よるべも涙の

袖ぞいとなき。よしやしばし社。岩にせかるゝ滝川の。破れてもするの逢瀬の。たのみをかけて。木綿四手の。神の恵みの明らかに照させ給へ。我こゝろく。  
(中入)

次第 「替る浮世もかはらざる。く。妹背の川ぞ頼もしき。

ワキ詞 「是は濱田の何某にて候。扱も我よしなき人の讒奏により。遠流の身と成て候へども。我身に誤りな

きむねを君聞召分られ。此度御免を蒙り本領安堵し。唯今都へ上り候。急候程に。是ははや都に着て候。是成館が某が家にて有げに候。浅ましや我流人の身となれば。住こし宿もあれ果て。庭も籬もよもぎふの。昔語りもおもひ出られ。目もあてられぬ有様にて候。

サシ「実や風碧瓦を飄へして雨垣を摧き。池は水草に埋れて。蛙あらそひ梟も。所得貌に嘯きて。誠に気

疎分野かな。

詞  
「いかに誰かある。濱田こそ此度御免を蒙りて罷帰りたるぞ。此よし申候へ。

ツレ女  
「や。是は目出度御事にて候。いそひで此由北の御方へ申さふづるにて候。いかに申上候。殿の御帰りにて候。急ひで御対面候へ。

シテ  
「何。殿の御帰りと申か。あらうれしや焉くに御渡り候ぞ。

ワキ 「なふ某こそ帰りて候へ。何とてかやうに御やつれ候ぞ。

シテ 「実や何事も。隔てぬ中といひながら。かく浅ましくおとろえし。姿ま見ゆる愧かしさよ。さりながら。君を思ひの涙の面に。花の袂は朽ぬとも。情の色はうつろはぬ。心の内を思ひ知れ。

ワキ詞 「勝々うれしき仰かな。我も年月思ひの外に。つらき配所の身と成しも。花の袂に置露の。むすぶ契

りの色かへぬ。

カル 「心のとがと夕月の。

シテ 「都隔つる遠島に。

ワキ 「うき春秋を。

シテ 「ふるさとは。

同 「浅茅が原とあれ果て。く。昔忍ぶの軒端もる。

月はけうとき影ながら。かはらぬ色ぞ嬉敷。実やあふせは久堅の。雲るとゞろく鳴神も。おもひし

中はさけぬと聞に付ても。たのもしやく。

クリ地  
「実や臂上の蜥蜴色変ぜず。鹿葱花發けて更に。萎

む事なし。

シテサシ  
「彼唐の貞女と哉覧は。両夫にま見えん事を恥て。

同  
「おもひの淵に身を沈め。桑を拾ひし女は妻の。不義を恨みて身を失ふ。

シテ  
「是皆直なる貞節の。

同  
「心を見する。ためしとかや。

クセ  
「爰に武蔵守。師直と聞えし。いみじき人の有けるが。其比出雲の国の守。塩治の高貞といふ人の。

妻は世上にかくれなき。美人の聞えありしかば。

師直垣間見て。和利なく思ひ染衣の。色に出行恋ごゝろ。物やおもふと人のとふ迄うつゝなき。涙の床に起もせず。寐もせで夜半をあかしがた。汀

にあさる雁金の。翅につけて玉章の。数かさなれど徒に。ふみ返さるゝ丸木ばし。落る袂の涙こそ。

恋しき人の記念なれと。おもひ返して返すだに。  
手やふれけんとおもふにぞ。我文ながら。うちも  
おかげと。読やる言の葉にめでゝ。

シテ  
「唯さよ衣とのみ。

同  
「返しければ。あだ人の。こはそも何と夕貌の。  
空めもやらでくり返す。心まどひて事とへば。さ  
なきだに。おもきがうへのさよ衣。我妻ならぬ。  
妻なかさねそと読し歌の心ぞと。聞よりいとゞあ

くがれて。飛たつのみ歎恋ごゝろ。情も知らぬ武  
士の。さるなき中言によりて。うき名。高貞諸  
共に。身を捨て世語りの。哀れ今更知られたり。

ロング、地  
「去ながら。それは昔のあだ人の。うき身を捨て物  
語り。是は二度故里に。帰りあふせの身ぞうれし。  
シテ  
「嬉しさを。何にたとへん夕暮の。月も晴行思ひ妻。  
ともにかたしく袂かな。

地  
「袂も袖もうちかほる。古き軒端の梅のはな。

シテ  
「今悦びの。」

同 「色はへて。立まふ姿も花やかに。雪をめぐらす小  
忌衣。返す心もうつゝなや。しづやしづ。」  
(舞)

シテ、ワカ  
「賤や賤。しづの小手巻くり返し。」

地 「昔を今に返す袖かな。く。  
アタル  
「返す袖かな。」

シテ  
「返すうれしきあふむの袂。」

同 「返すうれしきあふむの袂。人のみるめもいとはぬ

中の。思ひも今はあら磯島津鳥。憂を忘るる都  
の春の。月はむかしにかはらぬ閨ふく松風に。浮  
世の夢も明方の空の。虚言なかりし誓ひの言葉。  
くの。すゑ頼もしき契かな。